

シューター指揮官とジャベリンちゃん

竹森

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シューティングゲーム好きの指揮官が、近海演習やホーネットとの本気の戦いを経て、ジャベリンやホーネットと仲良くなる話。

「ホーネット↓蜂↓『首領蜂』シリーズ」という安易な発想から生まれた話です。

## 目次

1話 「男ならこれ（ジャベリン）を選べ」	1
2話 「嗚呼、ジャベリンが行く」	9
3話 「NO REFUGE」	14
4話 「まだみぬ未来を」	26

## 1話「男ならこれ（ジャベリン）を選べ」

初期艦。この世界の指揮官すべてが最初にする選択である。彼らは何を基準にそれを選ぶだろうか。外見や性格、声の好みだろうか。用意周到な指揮官は、事前に入手した情報を基に戦力で選ぶかもしれない。日本人だから、という理由で綾波を選ぶ指揮官もいるだろう。しかしこの物語の主人公はその何れでもなかった。

8月4日。この日赴任したとある指揮官は、何のためらいもなく即座にジャベリンを選択した。

そんな彼の前にジャベリンが現れる。選んでくれたのが嬉しいのか、ニコニコと満面の笑みを浮かべている。

「はじめまして、ジャベリンです！えへへ、すつごく早く選んでくれましたよね！もしかして私がタイプの子だったとか……ですか？」

「ああ……ジャベリン、俺はお前に運命的なものを感じている」

「ええっ！や、やだなあ、指揮官、プロポーズはまだ早いですよぉ」

ジャベリンは槍をブンブンと振り回しながら照れる。

「ジャベリンの髪は紫色だから、青っぽいとも言えるよな」

「え？」

槍をピタリと止め、キョトンとした表情のジャベリン。指揮官はそれに構わず話を続ける。

「つまり、ブルーだ。それとお前の名前をつなげるとブルージャベリンになるよな？」

「まあ、そう……なのかな……？」

「俺が非常に好きなシューティングゲームがあつてな……そのゲームでブルージャベリンという機体を愛用しているんだ」

呆けているジャベリンを他所に、指揮官は拳をぐつと固め熱弁する。

「まさか俺の愛機と同じ名前の艦がいるとは……これを運命と言わずしてなんとする!？」

「ええ……そ、そんな理由ですか？」

この男、重度のシューティングゲームマニアであった。

ここは基地の執務室。

自己紹介を兼ね、彼は指揮官になった経緯を語っていた。彼は小さい頃から、幾多のシューティングゲームをやりこむ根っからのシューターであった。艦を率いて、敵弾をくぐり抜け敵を撃破する指揮官という仕事にシューティング的なモノを感じ、志願したのだという。そんな彼の最も好きなゲームの一つに、ブルージャベリンという機体が登場するそうなの。

「という訳でブルージャベリン」

「ジャベリンですっ！指揮官、女の子の名前を間違えちゃうのはNGですよ？嫌われちゃいますよ？」

「失敬な、間違えたわけじゃない。愛称みたいなもんだよ」

「なんで本名より愛称の方が長いんですか!?というかブルージャベリンって機体の名前であってジャベリンの名前じゃないですよね!? ジャベリンにはジャベリンっていう立派な名前があるんですから、ジャベリンって呼んで欲しいんですっ！」

「ジャベリン」というワードがゲシュタルト崩壊を起こす勢いでジャベリンが猛抗議する。指揮官は顎に手をやり少し思案してから

「ふむ、わかった。ではジャベリン」

「……抗議しておいてアレですけど、随分あっさりですね？」  
「嫌がつてるならやめた方がいいかなって。悪かったよ」

そういつて素直に頭を下げる。変な人だけど、ちよつと優しい所もあるのかもしれない。ジャベリンはそう思いホツと息をつく。

「これから長い付き合いになりそうだしな。よろしく頼むよ、ジャベリン」

「はいっ！よろしくお願ひしますですー！」

二人はがっちりと固い握手を交わす。

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「まずは近海で演習を受けることになってるみたいですよ」

指揮官はつまらなさそうに両腕を頭の後ろで組み、椅子に体重を預けた。

「ああ、操作に慣れよう的な。一番つままない所だな」

「指揮官がそれ言っちゃダメじゃないかなあ……」

「操作がシンプルなシューティングばっかやってるせいかな、アレコレ説明されるの苦手でさ。取説とか読むのめんどくさいだろ？それと同じ感覚だな」

「あ、わかります。説明書読んでも全然頭に入ってこないですよね」

「そうそう」

「やってる内に身体が覚えるからいいんじゃないかなって思ったり」

「そうそう」

「薬の分量とかも見ずに飲んじやいますもん」

「そこは読んどけよ」

「手のひら返しが早すぎますよ!?!」

「いや、見なくていいのを見なきや駄目なの二種類があるだろ。薬はどう考えても後者じゃん」

「むーむー」

特にこれと言った反論も思いつかないのか、ジャベリンは口をとがらせたうめくのみ。彼は軽く肩をすくめた。

「指揮官もしかしてアレですか、発砲されたら東軍に寝返っちゃうタイプの人ですか」

「何でそんな話知ってんだ」

「えっへん、ジャベリンは意外と博識なんですよ!」

「自分で意外って言うかな、フツウ。というか博識なら薬の分量くらいちゃんと」

「き、聞こえませーん」

ジャベリンは耳を両手で塞いで、聞こえないフリを決め込む。それを見た指揮官は小声で呟いた。

「薬には副作用とかあるんだからさ。過剰摂取して何かあったら心配だろ」

それを聞くやいなや、ジャベリンは手を耳から離して指揮官をつんつんしだした。

「何だ〜心配なら心配って言えばいいのに〜。指揮官も素直じゃないですよ〜！素直な方が女の子にモテるんですよ?」

「めっちゃ聞こえてるじゃん」

一通り自己紹介が終わった二人は、とりあえず港へ向かった。

今年の夏は暑く、太陽の光が必要以上に二人に注がれる。執務室に戻るのも面倒なので、二人して物陰の階段に座り込み、ぼーっとしながら海の彼方を眺める。波音以外は何も聞こえない。

「指揮官指揮官。こうしていると、なんだか世界に私達だけしかいないような気持ちになってきませんか?」

「なにそれこわい」

「いや、世界の終末的な意味じゃなくてですね」

「そうじゃなくて、ジャベリンがそう思うこと自体が」

「……ジャベリンのこと何だと思ってるんですか?」

「楽観て……じゃなくて能天……じゃなくてバ……じゃなくて何も考えてない」

「言い換える度に酷くなるのやめて!」

「冗談だよ。そういうセンチメンタルな一面もあるのが意外だな、と思ったのは本当だけど」

「ちよつと陰がある方が女の子は可愛いんですよ♪」

人差し指を立て、何故かドヤ顔で語る。それは陰というより裏表のなさを強調させる、子供っぽく無邪気な笑顔であった。

「自分でそう言ってる時点で陰はないと思うぞ」

「そ、そんなことないもん!あるもん!」

「お前そんなに陰欲しいの?別になくたっていいだろ。明るくて元気いっぱいな娘がいたっていいじゃん」

「そ、そうですか?えへへ……じゃあなくてもいいです」

途端に機嫌が良くなる。笑ったり怒ったり忙しい娘だと思いつ

つ、指揮官は頬を緩める。しかし

「あ、そうそう。言い忘れてたんですけど、今回の演習では、ユニオン陣営のホーネットさんが相手をしてくれるみたいです」

「何、ホーネット!?!」

その表情はジャベリンの発言により一変する。今までになく顔が険しくなり、目が血走っている。興奮しているようでも、予想外の情報に驚愕PANICしているようでもある。

「きゃあ!急にテンション上げないでください!ホーネットさんのこと知ってるんですか?」

「いや全く。でもホーネットってことはつまり蜂なんだろう!?そりゃテンションも上がるよ!」

「訳さないでください!艦名訳す人がどこにいるんですか!そうなたらジャベリンなんて投げ槍か槍投げになっちゃうんですけど!」

「ジャベリン、これだけは覚えておけ。シューターの中には、蜂と鯨を見ると血が滾る層がいる」

“蜂”を倒すことは、シューター、特に弾幕シューティングを好む者にとって憧れの一つであった。功績と言っても過言ではない。登山家がエベレスト登頂を目指すようなものだ。しかしジャベリンがそれを知るはずもない。熱く語る指揮官に対し、冷めた対応を取る。

「そこだけ聞くとちよつと変な人みたいですね」

「実際変だし」

「あ、開き直った」

「というわけでさっさと出撃しようぞー!」

「武将ですか!まだロングアイランドさんがいませんから無理です!」

「どなた?」

「旗艦を務めてくれる艦です。旗艦がいないと出撃できませんから」

「へえーへえーへえー」

指揮官はそう言いながら手のひらを空中で上下させる。

「15へえです!」

「なんですかそれ?」



「明日使えるムダ知識を教えてくださいました時の礼儀」

「へー……って旗艦はムダ知識じゃないですよ！戦闘の基本なんですからー」

「まあそれはそれとして」

「スルーされた！」

指揮官は立ち上がり周囲を見渡す。誰もいない。もう一度、見逃しがないよう周囲をよく観察する。何度見ても自分とジャベリン以外はいない。

「演習まで後20分くらいしかないけど、大丈夫なのか？」

「ギリギリまで寮舎に引きこもるって言ってました。外にいる時間はできるだけ短くしたいとか」

「間に合うなら良いけどさ。もしかしてインドアな性格なの？」

「みたいです」

「ふーん、俺とは真逆だな」

「あれ、アウトドア派なんですか？ゲーム好きって言ってたから意外」

「シューティングはゲーセンでやるものだと思ってるからね」

「それアウトドアじゃないです」

「反論された指揮官はチツチツと指を振る。」

「でも人に趣味聞かれた時、

アウトドアを少々……ええ、体を動かす（レバー操作のこと）のが好きでして……」

「って言ったら心象はバツチリだぞ」

「指揮官指揮官、それ詐欺じゃないですか？」

「人聞きの悪いことを言うな。事実誤認するようにちよつと誘導しているだけだ」

「それを詐欺って言うんじゃない……」

「そういうお前はどうかんだ。何となくアウトドアが似合う感じがするけど」

「はい！ジャベリンは外で遊ぶ方が好きですよ！」

「俺と同じか」

「違います！……あつ、そうだ。指揮官はアウトドアをよくわかってないみたいですから、今度ジャベリンと一緒に遊びに行きませんか？」

「えー、すっごい疲れそう」

「そんなことないですよ！色々教えてあげますから！楽しいですから！ねっ、ねっ、ねっ」

顔をグイグイと近付けるジャベリン。距離を取ろうにも、座っているので限界がある。

「近い近い！わかった、わかったよ。休暇が取れて、俺がやるべきシューティングが何もなく、ゲーセンが閉まったら、行くよ」

「条件が多いんですけど！減らして、減らして〜！」

「はっはっは、シュータージョーク、シュータージョーク」

その直後。演習開始5分前を告げるサイレンが鳴り響く。指揮官は寮舎のある方角を一瞥する。袖の余った服をたなびかせこちらにやってくる少女がいた。彼女がロングアイランドのようだ。それを見て彼は安堵し、出陣すべく立ち上がる。

「さて、行こうか」

「……」

「ジャベリン？」

ジャベリンは座ったままじっとしていた。先程までとは打って変わって、借りてきた猫のように静かだ。身体は強張り、表情もどこかおどおどしている様子だった。指揮官は再び語りかける。さつきよりも少し柔らかい言い方で。

「ジャベリン」

「あ、す、すいません。聞いてませんでした。なんだか緊張して……」  
「気にするな。そっか、お前も初陣なのか」

「さつきまでは全然気にしてなかったんですけど、サイレン聞いたら色々意識しちゃって。あはは……変ですよ、演習なのに」

「変ってこたないだろ」

彼は少し目を伏せてから顔をあげ、

「ところで、戦闘のやり方でオートとマニュアルってのがあらしい

な」

「あ、はい。マニュアルは指揮官が指示を出して、オートは艦達の独断で、って感じです」

「じゃあマニュアルで行こうか。ほら、やっぱり自分でやりたいじゃん？俺の弾除けスキルをいっぱい見せびらかしたい」

「はあ……」

「というわけで俺のレバーさばきに乞うご期待！」

「レバーなんてないですから……それに、ジャベリンが直接操作されるわけではないですよ」

「ゲーム的には、そういう設定の方が気分出るのです。だからその体で行こうじゃないか」

「まあ、いいですけど……」

「というわけで俺プレイヤーの役やるから、ジャベリン操作される役やって」

「なんですか、その漫才コントの入り方みたいなの」

「いいからいいから。頑張ってきてね」

「何か緊張感なくなっちゃうなあ……」

そうなるよう、わざとふざけたのかも知れない。しかし指揮官の真意について深く考える余裕はないようだ。またしてもサイレンが鳴り響く。演習は今まさに始まったのだ。

ジャベリンは息を大きく吸う。さつきよりも随分楽になった気がする。彼女は指揮官に笑いかけた。

「それじゃあ……ジャベリン、全力で行きま〜す——」

「いってら〜」

「——ですー！」

「……いってら〜」

台詞の途中だったのかと思いつつ、指揮官は手を振ってジャベリンを見送った。

続く

## 2話 「嗚呼、ジャベリンが行く」

西から東へまっすぐ進むのが、演習のルートだった。

すぐ進軍するのではなく、指揮官はまずジャベリンに自由に動いてもらい、それをチェックした。最初に味方の戦力を細かく分析するのが彼のやり方であった。彼は眉一つ動かさず、注意深く観察していた。しばらくしてジャベリンを呼び戻す。彼女は怪訝な顔をして尋ねた。

「進まなくていいんですか？」

「いやさ、ちよつと気になることがあったんでね」

「あ、そう言えばまだ話してませんかでしたよね。ジャベリンの趣味は弁当……」

「お見合いかよ。そんなことよりだな」

「そんなことってなんですか!? もつとジャベリンに興味を持ってくださいよー!」

「曲がりなりにも演習中に自己紹介聞くわけないだろ! お前のんきか! さっき緊張してたお前はどこ行ったんだよ!」

「指揮官が変なこと言ったから、どっか行っちゃいました」

「緊張ってそんなすぐ吹っ飛ぶものなの? ま、まあ趣味の話は戦争の後で聞くから」

「戦争終わるまで趣味の話しちやいけないんですか!? もつと手前! もつと手前にしてください!」

「お前、欲しがりません勝つまではという名セリフを知らないのか?」

「標語でしょ、標語! なんですか、名セリフって。誰の発言ですか」

「当時の小5の女子らしいよ」

「え、そうなんですか。へえ、知りませんでした」

旗艦の話をした時の指揮官の真似のつもりか、手のひらを上下させている。これで合ってる? と確認するような視線を送る。指揮官がうんうんと頷くと、ジャベリンは新しいおもちゃでも見つけたみたいだに、無邪気に手をパタパタとさせた。

しばらくして我に返ったジャベリンは可愛らしく小首を傾げた。

「何の話でしたっけ？」

「ああ……」

指揮官は話を元に戻そうと、コホンと一つ咳をする。

「移動速度のことを聞こうと思ったんだ。何か遅くないか？」

「そんなことないですよ？ ジャベリン、駆逐艦だからむしろ早い方です」

「そうなの？」

「はい」

ジャベリンはこくと頷く。

「この倍は欲しい」

「ジャベリンを過労死させる気ですか!？」

「それはつまり死ぬ気でやれば出来るってこと？ それじゃ」

「やりません!」

ジャベリンがぶんぶんと首を振る。その度に、ポニーテールがふわふわと揺れる。

「でも2倍頑張ったら、戦闘時間も半分で済んで、結果同じ労力になるかも」

「攻撃力は変わりませんから! ぜったいたい、やりません!」

「ちえー」

そんなこんなで二人は進軍を開始した。目の前に大小様々な量産型の艦が現れ、弾を撃ってきた。移動速度を倍にすることを諦めた指揮官は、それに対し指示を出していく。

熟練のシューターとしての実力か、敵弾の軌道を読み、的確に処理していく。

「ジャベリン、そこチョン避けだ!」

「え、チョン……なんですか?」

「少し上か下に動くこと」

「ああ、チョンつと避けるってことなんですね」

最初の内は使う用語にすれ違いもあったが、次第に指示がちやんと伝わるようになっていく。

今の所ジャベリンは全くの無傷だった。しかしそれが指揮官だけ

の成果でないことは、彼自身よくわかっていた。

ジャベリンもまた、弾を見切り、避けるのを得意としているようだった。それに気付いたのは、指示がやや遅れ、ジャベリンが非常に際どい弾除けをする羽目になった時のことだった。指揮官の指示は守りつつ、その上でより安全に回避出来るよう彼女は動いていた。おそらく自分なりのルートを見つけているのだと、彼は考察した。

だがやはりまだお互いに初陣、どこか不慣れな部分も見受けられる。しばらくして、ついにジャベリンに小さな敵弾が当たる。

再び戦闘を中断させ、慌ててジャベリンの元へ駆け寄る。

「すまん！被弾させちゃった！」

「指揮官、私の心配してくれてるんですか？えへへ。でも、ジャベリンは平気ですよ！」

ジャベリンは小さくガッツポーズをとった。指揮官はそれを喜ぶ……わけでもなく、目を見開き、ただただ驚いていた。

「え、何で生きてるの」

「えっ」

「ありえない、何かの間違いではないのか？」

「何を言ってるのか、サッパリわかんないんですけど……」

「いやシューティングって大体1回被弾で即死じゃん？だからジャベリンもそうなのかと」

「そんな過酷な戦い嫌だなあ」

「そうかな、普通だと思っけど」

「指揮官の常識が危ない」

指揮官はジロジロとジャベリンの全身を眺める。彼女は恥ずかしくて体がくねらせる。

「し、指揮官、恥ずかしいですよ」

「ううむ、被弾してもピンピンしてる……もしかしてジャベリン、実はものすごい艦だったりする？」

「褒められてるはずなのに、何故かそんな気がしません……」

「何で？」

「現実的に考えてください。一撃で沈む艦があったら役に立たないで

しよ？その度に建造しなきゃいけなくなりませすし。時間もお金も、いくらあっても足りなくなっちゃいます」

「……………」

指揮官はジャベリンの話を聞いているのか聞いていないのか、よくわからない呆けた表情をしていた。

「あの、指揮官？聞いてます？」

「聞いているけど……艦が美少女化してる時点で、現実的も何もないだろうと思つて」

「急に正論言わないでください！微妙にメタいし、もう……つて、あれ？」

突っ込んだ直後、ジャベリンは何か気づいたように手のひらで口元を隠す。それを気にかけることもなく、指揮官は一人戦闘の方針について考えていた。

「結構耐えられるってことは、全部避ける必要はないってことか？なら大きなダメージだけ食らわないようにすれば……ん？ジャベリン？何で俺の顔をそんなに覗き込んでるんだ？」

もじもじしながら、上目遣いで指揮官の目をじっと見つめている。何か悩んでいるようにも、恥ずかしがっているようにも見えるが、指揮官に心当たりはない。

「指揮官、美少女って言いましたよね？」

「うん？」

「だから、艦のこと」

「言つたけど、それが？」

要領を得ないと言わんばかりに首をひねる。

「指揮官、着任してからほとんど私としか喋ってないですよね？つてことは、もしかして……ジャベリンのこと、美少女だと思つてるん……ですか？」

「……………」

余計なことを言ってしまった。そう思い彼は指でこめかみを押さえる。

「あの、何か言ってくれると嬉しいんですけど……そうなんですか？」

「……………」

彼は何も言わず、視線をジャベリンから逸した。が、ジャベリンはトコトコと目を合わせに来た。今度は身体を回転させ視線から逃れる。その努力も虚しくジャベリンが即座に目の前までやってくる。

「指揮官、しーきーかーんーってばー」

目を逸らし続ける指揮官。しかしその度にジャベリンが視界に入り込んで来る。それが何度か続いた。傍から見ると、ジャベリンが指揮官の周りをクルクル周っているようにしか見えない。

指揮官は貝のように口を閉ざし続ける。それでもなお、ジャベリンはしつこく食い下がる。

「ねえねえ、誰にも言いませんから！本当は、どう思ってるんですか？」

「あんな、ジャベリン」

「はいー」

ジャベリンがぴよんと一度跳ね、直立不動になる。期待感に目をキラキラさせながら指揮官をじいつと見つめている。

「うざい」

「指揮官ひどい！言うに事欠いてうざいってー！」

「うっさい！ほら、戦闘再開するから、ちゃんとやるんだぞ！」

シツシツと手を振ってジャベリンを追っ払う。彼女は何度もチラチラッと指揮官の方を見ながら

「むー、指揮官のいけず。でも戦闘が終わったら、絶対言ってもらおうもん！戦争じゃないですよ、戦闘ですからね！」

指揮官はジャベリンの発言を右から左に聞き流し、絶対言わないと心に誓った。

続く



### 3話「NO REFUGE」

以降は特に問題もなく、順調に海域を押し進めていく。

そろそろ終わりも近付こうかという頃、水平線の向こうに黒い姿が見えた。大きくなるにつれ、それが黒衣をまとい、長い金髪を左右で結った少女であることがわかった。少女は帽子を指先で回していたが、こちらの姿を確認すると指先で帽子を浮かせた。緩やかに軌道を描く帽子は、それが定位置であるかのように、彼女のツインテールの間に綺麗に収まった。

「ハロー、あなたが新米指揮官さん？私ホーネット！」

「蜂だー！」

「え、どこどこ?!刺されるのヤダ！」

ホーネットが少し怯えたように周囲を見る。

「すみません、ホーネットさん。うちの指揮官変な人なので、スルーでお願いします」

「いやあそれほどでも」

「褒めてませーん。ほら、ちゃんと自己紹介しないと」

「そうだな。俺が指揮官だ。よろしく頼む。この槍を持つてる娘がジャベリンだ。強いぞ」

「よろしくお願ひします！」

そうやって会釈をする二人。それに対しホーネットはひらひらと手を振って応える。

「よろしくねー。それよりさ、早速やろうよ。待ちくたびれちゃった」

「ああ、俺もお前と戦うのを楽しみにしてた」

「嬉しいこと言ってくれるわね。わかった、姉ちゃん達ほどじゃないけど、私の実力見せてあげる！」

そう言つてホーネットは艦載機を構える。

「さあ、来い！ジャベリンもよろしくな！」

「はーいー！」

お互い臨戦態勢に入る。手始めにホーネットが弾幕をばらまく。扇状に6つの針弾が飛んでくる。少しして同様の弾幕を、その次には

同じ弾幕を2連続で繰り出す。その後暫しのクールタイムを挟み、また弾幕をばらまく。それが彼女の攻撃パターンのようなだった。

はつきり言つて、非常に避けやすい弾幕だ。指揮官は物足りなさを感じていた。そこで

「タイム」

「今度はなんですか？」

「なにに、どうしたの？」

両腕でTの字を作る指揮官を訝しむジャベリンとホーネット。

「ホーネット。お前の弾幕だが……薄くないか？」

「演習だもん、だいぶ手は抜いてるよ」

「折角の機会だから、お前の本当の実力が見たい」

彼がそう言うと、ホーネットは白い歯を見せ不敵に笑った。

「へえー、新米にしてはイキがいいね！でもいいのかな？私、手加減は苦手だよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

「ジャベリンは大丈夫じゃないです！」

ジャベリンが口をとがらせて抗議する。ホーネットはからからと笑つて

「平気平気。演習弾だから死にはしないって」

「そういう問題じゃないですよね、ていうか痛いものは痛いですよね」

「じゃあ今までの42倍の弾数を希望したい」

「42倍ね。……42倍？」

思わず真顔になってホーネットが聞き返す。聞き間違いだろうか、そう思ったのだ。しかしそうではなかった。指揮官は頷いて

「正確に言うと、常時256発出し続けて欲しい」

「それ誰が避けるんですか？ジャベリンですよね？」

「いや……それはちよつと無理かな、って」

ホーネットはうつむき、帽子のつばに手をやった。

「そもそもそんなに出せる艦いるのかな？姉ちゃんでも多分……」

「さつきも言つてたけど、姉ちゃんって？」

「ホーネットさんには、ヨークタウンさんとエンタープライズさんと

「いうお姉さんがいるんですよ。特にエンタープライズさんは最強の空母と言われている」

「彩京か。ものすごい早い弾撃ってきそう」

「あ、全く違う話してる気がする」

「ホーネットの先程までの笑顔は鳴りを潜め、少し自信を失っていた。それほどに指揮官の要求は無茶なものだった。」

（何で、私にそんなこと求めるのかな？）

「彼女は一笑に付しても何ら問題のない、無茶苦茶な要求について真剣に考えていた。自分に、それが出来るのだろうか、もし出来なかつたらガツカリされるだろうか、と。ホーネットにはそういう、妙に生真面目なところがあつた。」

「考え込んでいる彼女を見て指揮官が叫ぶ。」

「ホーネット！俺はお前に期待しているんだ！」

「そ、そうは言うけどさ、私より姉達の方が、あなたに応えられる可能性高いと思うよ？私じゃちよつと……」

「いや！お前でなくてはならない！ホーネット（蜂）だからこそ出来ることがあると信じている！姉ではない、お前だけが、だ！」

「良いこと言ってるようで見当違いですよ、それ」

「ホーネットという名前に別の“蜂”を重ね合わせているだけと知っているジャベリンが冷静なツツコミをする。無論ホーネットはそんなことを知らないのです、素直に指揮官の発言を受け止める。」

「それ、本気で言ってる？」

「ああ。だから今日の演習でもお前に会うのを楽しみにしていた」  
「……………」

「ホーネットは昔から、二人の姉と比較されて生きてきた。それに慣れすぎていたから、この指揮官の言ってることは新鮮に感じたが、同時に動揺もした。」

「無論、ホーネット自身も確かな実績を上げてきた艦だ。だが、その実績は姉、特に最強と謳われるエンタープライズと常に比較された。「エンタープライズの妹」として評価されることもしばしばあつた。その度に姉を誇りに思うのと、自分自身を褒めてほしいという、相反」

する二つの感情が混ぜこぜになり、複雑な気持ちにさせられた。

だから、いざ自分自身を見つめられると、どう反応すれば良いのかわからなかった。喜んだ方がいいのだろうか、自信満々に接すればいいのだろうか。どう返すのが正しいのだろうか。

「私にしか出来ないこと、か。あなたは、本当にあると思う?」

結局、さつき指揮官が言ったことを、オウムのように再確認しただけだった。もっと気の利いたことは言えないのかと、口に出してから少し後悔した。かと言って、何がベストなのかはわからない。

それに対して指揮官はきちんと返事をした。

「思わないなら、こんな事は言わない」

「そっか……」

嘘を言っている様子はない。指揮官はいたって真面目だった。

ホーネットは目を閉じ、深呼吸する。

今の自分に、この指揮官が言うような凄まじい弾幕が撃てるとは思わない。ただ、それに挑戦してみても良いかも知れない。だってここには、私に、私だけに出来る何かを期待してくれている人がいるのだから。

彼女は目を見開いた。先程までの悩みは消え失せ、今日の天気のように、清々しい気分だった。

「わかったよ。それじゃ、本気で行かせてもらおうからね!」

「あ、あんなに焚き付けちゃって大丈夫ですか? ホーネットさん、かなり強いんですよ?」

「出来るだけのことはする。だからジャベリン、頼むぞ。お前にだって期待してるんだ」

「指揮官……はい! 頑張ります!」

ジャベリンは槍を固く握りしめ、ホーネットの方を向いた。いつ指揮官から指示が来てもいいように、今まで以上に集中力を高めた。

少ししてから、ホーネットが弾幕を張る。さつきの倍以上の針弾が飛んでくる。弾幕と弾幕の間隔も短くなっており、クールタイムもない。今まではやはり手加減していたのだと思知らされる。

しかし、指揮官はそれを的確に処理していく。最初はギリギリで避

けていたが、段々余裕が生まれてくる。彼は経験上、弾幕の性質を把握することには長けていた。

「へえやるねー!」

ホーネットは感心したように言う。普段戦っている相手でもここまで避ける奴は、そうはいない。

「これなら、どう?!」

弾速が早くなる。弾幕も緩急を織り交ぜ、避けたところに被弾するよう工夫した。これがホーネットの現状出せるベストだった。

複雑な弾幕を避ける最中、ジャベリンのバランスが崩れる。ホーネットはその隙を見逃さず、高速弾を撃ち込む。空気を切り裂かんばかりの勢いで、立て直しを図るジャベリンに迫り来る。

「ジャベリン、そのまま倒れ込め!」

ジャベリンは一瞬戸惑いを覚えながらも、指揮官を信じ重力に身を任せる。本来立っているべき場所を弾が通り過ぎる。弾を辛うじて避けると、ジャベリンはすぐに体勢を整えた。

「あ、危なかった〜」

「ちえっ、今のは当たったと思ったんだけどな」

悔しそうにホーネットが呟く。立て直した所に直撃するよう撃つたつもりだった。しかし指揮官はそれを弾の軌道から計算して見抜き、敢えて倒れ込ませたのだ。

以降も同じようにジャベリンを弾幕で覆い尽くす。チャンスこそ生まれるものの、指揮官の素早くて確かな指示が被弾を許さない。

「あー、もう! 何で当たらないかな! 無茶苦茶言ってくれるだけのことはあるわね! 悔しい!」

口ではそういつつ、ホーネットは笑っていた。だが本人はそれに気付いていない。

しばらく同じ光景が繰り返された。戦闘はまさしく膠着状態にある。ホーネットの弾幕はこの二人には通用しなかった。一方のジャベリンの打ち出す弾も、ホーネットに当たってこそのいるものの、所詮

は駆逐艦。決定打にはならない、かすり傷のようなものに過ぎない。

ホーネットは考える。このまま行けば、自分が勝つ。

ずっとジャベリンが避け続けければ、塵も積もればなんとやらで、ホーネットの体力はなくなるだろう。だがそれは現実的ではない。ダメージを受けずとも、積み重なる疲労は回避の精度を落とす。現に、ジャベリンは呼吸が乱れてきていた。だから、こちらの攻撃が当たる時が来るだろう。こちらが受けるダメージは小さいのだ。持久戦に持ち込めば、ホーネットの有利は間違いなかった。

しかし。ホーネットは誰にも気付かれない程度に、首を左右に振った。

(それじゃ、つまんないわね)

それで、勝ちたくない。そうホーネットは思った。指揮官が自分に寄せている期待はそういうものではないだろう。

もっと派手に、もっと楽しく、もっと“自分らしく”、勝ちたい。この膠着状態を一変させるような、劇的な方法で。彼女はいつしか勝ち方を考えるようになっていた。

(“あれ”が上手く行けば、それが出来るはず……でも)

“それ”は実現性が低く、切り札と言うには少々頼りなかった。実戦でもほとんど決めたことはない。だがホーネットは、今こそ“それを決めるべき場面だ”と思っていた。

(……何でだろう。何か、楽しいな)

あれこれと考えている内に、高揚している自分に気付く。戦っていてここまで楽しくなることは、今までなかった。もちろん、勝利すること自体は嬉しい。しかし今の感じている楽しさは、それとは別の種類のようには思えた。その正体は掴みきれないが、それが何に由来するかはわかっていた。

自分に期待してくれている人がいるからだ。他の誰でもない、自身に。ホーネットはそれが無性に嬉しかったのだ。だから、出来ることは全てしたいと思った。勝つために戦うというよりは、自分もつと凄いとるところを見てほしいと思うようになっていた。自分には、何か出来ることがあるのかも知れないと思うことが、何より楽しいの

だ。

ホーネットは艦載機を再び構える。その時だった。ホーネットが一瞬、まばゆい光に包まれる。彼女の持つ二つの固有スキルが同時発動したのだ。ジャベリンを巨大な爆撃機の影が包み込む。その直後、おびただしい数の弾が頭上から前からジャベリンに降り注ぐ。その濃密さは今までの比ではなく、ジャベリンからホーネットの姿がほとんど見えなくなるほどだった。

ホーネットはそれに確かな手応えを感じていた。まさしく今出せる100%の力だった。実戦で決めたことこそ少ないが、ホーネットが全力を出せた時、敵は塵芥となるのが常であった。

ここまで避け続け、無傷のジャベリンも流石に慌てふためく。

「わっ、わっ！し、ししし指揮官指揮官！どうするんですかこれ!?」

「俺の指示通りに動いてくれ！」

「わ、わかりました！」

今までになく細かい指示をジャベリンに投げかける。指揮官は歯を食いしばり、冷や汗をかいていた。今や弾幕を完全に避けきれるとは言い難い状況にあった。

ジャベリンは忠実に指示に従った。1巡目、避ける。2巡目、避ける。しかし弾がジャベリンの頬をかすめた。

3巡目でついに被弾する。これを皮切りに、次第に被弾する回数が増えていき、合計で10回ほど被弾した。しかし、指揮官の弾幕を見切る能力と、ジャベリンの巧みな回避能力があったからこそ、これで済んだと言える。普通の敵であれば、その10倍近く被弾し、さらに実弾であれば跡形もなく沈められていたに違いない。

「ジャベリン、大丈夫か!？」

「な、なんとか無事です」

ジャベリンの元気そうな声を聞いて彼は胸を撫で下ろした。しかしすぐに身を引き締める。次同じ攻撃をされたら、今度こそジャベリンが危ない。

しかし、その心配は杞憂に終わった。ホーネットは何もしてこなかったのだ。何が起きたのか、指揮官は全くわかっていなかった。よ

くよくよく見てみるとホーネットは黒煙を上げ、足もがくがくと震えている。

「……何だ？何が起きたんだ？」

指揮官は首を捻った。ジャベリンの今までの攻撃が積み重なって限界を迎えたのだろうか。

一方のジャベリンは目に力強い輝きを宿らせ、ホーネットの方を睨みつけていた。

ホーネットは震える手で艦載機をしまい、海面に背中からダイブした。そのまま沈んでしまうかと思ったジャベリンと指揮官が慌てて近寄る。ホーネットは海に揺られながら

「いやー、負けちゃったなー。本気だったのに」

ホーネットはまだ経験豊かというほどではない。とは言え、新米の指揮官と艦よりはずっと、経験も実績もを積んでいるはずだ。そんな自分が負けた。本来なら恥ずべき場面かもしれない。しかし表情は悔しさを滲ませながらも、どこか晴れやかだった。

それを見た二人は一安心した。負傷しているものの、無事なようだ。

「まさか、あそこまでやってくれるとは思わなかった。見切れなかったよ」

彼は素直に称賛した。これが実弾であれば、あの時点で確実に負けていたし、ジャベリンも大破していただろう。演習弾だからこそその勝利だ。だから指揮官は、喜びはしなかった。むしろ、ホーネットに対する敬意が勝っていた。

「そりゃ、私の全力だもん、そう簡単に避けられちゃ嫌だよ。……でも、あなたの望みには応えられなかったんじゃないかな？」

「いや、充分すぎるくらいだ」

「……そっか。うん、なら良かった」

ホーネットは満足気に微笑む。負けたけど、良かった。

敵の疲労を待つせこい手口ではなく、今出せる自分の全てを出し切って、あれだけ避けていたジャベリンを被弾させた。一矢報いただけで、指揮官の期待に応えられただけで、彼女は満足だった。



指揮官はおもむろに頭を下げた。

「……悪かったな」

「え、何で急に謝るの?」

目をぱちぱちとさせるホーネット。彼はホーネットに期待を寄せていた理由を正直に話した。

「なーんだ、私のことを見てたわけじゃないんだ。道理で変だなあと思ったよ。あはは……」

ホーネットは寂しそうに笑う。それは彼女の功績が、姉の名前と共に褒められた時にする笑い方だった。

それを見て指揮官は大きく首を振る。

「だが、今は違う。ホーネットの……何て言うのかな、潜在能力みたいなものを見せつけられた気がする。お前にしか出来ないことは、やっぱりあると思ってる、本当に。信じろと言っても難しいかも知れないが……」

ホーネットはそんな彼を観察するように眺める。どう言えば信じてもらえるのかと探り探りで喋っているようだった。それは彼の誠実さとも、不器用さとも取れた。

「……ううん、信じるよ。だって、信じさせるだけならさっきの話する必要ないもんね」

ホーネットは真面目くさる指揮官を見てニヤリと笑う。

「最初はジャベリンが言ってたみたいに、ちよつと変わってる人だと思ってたけど、結構素直なんだね。バカ真面目って言うのかな?」  
「褒められてるのかバカにされてるのか……」

複雑な顔で首を傾げる。ホーネットはそれを見て思わず吹き出す。  
「褒めてるに決まってるじゃん!人間素直が一番よ」

ホーネットは身体を起こした。

「だから指揮官のこと、信じてみる。私だけにしか出来ないことがあるって、今はそんな気がしてるから」

今よりも姉との差を気にして躍起になっていた頃。長女のヨークタウンにこう言われたことがある。あなたにはあなたしか出来ないことがあるからもつと自信を持っていい、と。その時ホーネットはピ

ンとこなかった。彼女は身内だったし、何よりあまりに優しすぎた。その言葉は嬉しかったが、自分だけが持つ“何か”があるとは信じ切れなかった。しかし今、ようやく見えてきた気がする。いや、それを探すことを決意したと言うべきか。

ホーネットはビシツと指揮官を指差した。

「次はこうはいかないからね！今よりずっとずっと強くなって、絶対勝つんだから！」

指揮官はにこりと笑って

「ああ、俺達も、簡単に負けるわけにはいかない」

「なーんか、いい雰囲気ですね？」

「ここまで話に入ってこなかったジャベリンが二人をジト目で見つめている。頬がぷくーと膨らんでいる。

「わ、悪い。忘れてたわけじゃないんだが……」

「あはは、ごめんごめん」

平謝りする二人。頬の膨らみが少ししぼむ。

「そんなことより！ジャベリン、最後の魚雷は効いたわよ」

「魚雷？」

「そ、最後しれつと撃ってきたの。完璧にこっちの攻撃が決まったと思ってたから、びっくりしたな。ってあれ、指揮官の指示じゃないの？」

「そもそも俺、魚雷のこと知らないぞ」

最後の雨あられのような弾幕の中で、ジャベリンは高威力の魚雷を放っていた。無論、彼女の独断だ。これだけの弾幕なら、撃った張人も視認性が著しく落ちているとジャベリンは思っていた。故に弾幕を避けつつ、確実かつ出来るだけ多量の魚雷がヒットする角度、間合いでこつそりと放ったのだった。

ジャベリンの読み通り、ホーネットは忍び寄る魚雷に気付かなかつた。気付いたのは、命中した後だった。結果として彼女は致命傷を負ってしまったのだ。

指揮官は合点がいくと同時に、目を丸くした。弾除けのルートを彼女なりに考えてる時も薄々感じてはいたが、かなり機転が利く性格な

のではないかと本格的に思い始めていた。少なくとも、ただの明るく元気な少女ではないようだ。

「それならお前のお蔭で勝てたようなもんじゃないか。ありがとうな」

「そ、そんなに褒めないでくださいよ。あれはたまたまです、たまたま！」

ジャベリンは手をぶんぶん振って照れる。

「たまたまでも、あそこで魚雷撃つこと自体が凄いと思うわよ。お蔭で、私も今後改善しなきゃいけない点が見つかった気がする。ありがとうね、ジャベリン」

「ど、どういたしまして……?」

ジャベリンは戸惑っている。意外と素直に褒められるのに弱いんだらうかと指揮官は思った。

「さて、と。そろそろお別れだね。まだまだ話していたいけど……」

「その傷で大丈夫か?送っていくよ」

「あはは、へーきへーき。私の基地近いから。ていうか指揮官、狙ってる女の子に言うセリフみたいだよ?もしかして、そういうの慣れてるのかな?」

「い、いや、そういうつもりじゃなくて……」

やましいことがあるわけでもないのに、指揮官はつい後ずさった。

「あはははは、冗談だって。何か、変な感じ。戦闘中指示出してる指揮官は格好いいのに、今はすっごいからかい甲斐ある。あー、楽しい」

ホーネットはひとしきり笑ってから、今度は恥ずかしそうにうつむいた。両手の人差し指をつんつんさせている。そして恐る恐る、こう切り出した。

「あ、あのさ。本当に、また会ってくれる?」

「……何でそんなに弱気なんだ?」

「だ、だってさ、何か心配になっちゃって。ゴメン、疑ってるわけじゃないんだけど……」

「心配するなって。さっきも言っただろ?次に会うのが楽しみだつて」

そう言われホーネットは、ぱあつと満面の笑みを浮かべた。そして指揮官の手を取り、ぶんぶんと上下に振る。

「ホント!?絶対だよ!」

「ジャベリンも、ジャベリンも!戦闘以外でもホーネットさんと会いたいなあ」

ジャベリンがそう言うのと、ホーネットはやはり彼女の手を取りぶんぶんと上下に振った。

「あー良かった!じゃあさ、今度は姉たちに紹介させてよ」

すると、何故かジャベリンが過剰に反応した。

「家族に紹介!?き、気が早いですよ!」

「えっ!?ち、違うわよ、そういう意味じゃなくって!」

「保護者はどなたですか?」

「ヨークタウン姉さんだけど……」

「ほらやっぱり!そういうのは段階があるんですよ!」

「そ、そういうんじゃないわよ!」

……多分」

ホーネットは帽子で表情が見えないようにし、小声で呟いた。

「あ!今、多分って言った!言いましたよね!?聞き逃しませんよ!」

「ジャベリン、段階って何だ?」

「やだ指揮官!女の子にそんなこと言わせないでください!」

「そうだそうだ!」

「え、俺が悪いの?」

先程まで演習とは思えない激戦をしていた三人は、別れるギリギリまで、そうやって賑やかに過ごした。

続く

#### 4話 「まだみぬ未来を」

「指揮官くもっともっと褒めて〜」

演習を終え、執務室に戻るまでの道すがら、ジャベリンは何度もそうおねだりした。別れる寸前にホーネットから「二人は良いコンビだね」と言われて気を良くしているのだ。

「お前は、銀河一回避に強い艦だ!」

「えへへ〜。もっと違う褒め方もしてくださいよ〜」

「NICE PLAY!」

「ジャパニーズ・プリーズ!」

指揮官はボケを挟みつつも、律儀にそれに付き合う。彼は戦闘を通じて、ジャベリンのことを大いに評価するようになっていた。お互い回避が得意というのも相性が良いと感じていたし、確かに良いコンビのようだ。

そんなやり取りをしている内に執務室にたどり着く。

「あれ? 指揮官、何か来てますよ?」

指揮官のデスクに置かれたファックスから紙が吐き出されている。それをジャベリンが取る。最初はふむふむと言いながら読んでいたが、すぐに無口になり、顔が青ざめていく。ちよつと前までの無邪気な様子が嘘のようだった。

真後ろに立つ指揮官から彼女の表情は見えない。何も言わないジャベリンを不思議に思いつつ尋ねる。

「なんて書いてあるんだ?」

「……」

「ジャベリン?」

ジャベリンは振り向かずに囁くように答えた。

「……はい。鉄血と重桜が離反……したそうです」

「音楽性の違いか」

「私達の敵・セイレーンへの考え方の対立が原因で……」

「?」

露骨なボケにジャベリンが乗ってこない。先程までだったら強弱

は別としてツツコミが入っているはずだった。声色も、どうにも弱々しい。

不思議に思った指揮官は、ジャベリンの表情が見える位置に移動した。そして彼女の表情を見て眉をひそめた。

「レッドアクシズとして独立した、って……」

「第三勢力ってことか」

「これからどうなるんでしょう……」

普段の元気いっぱいな姿はどこへやら、ジャベリンは不安な面持ちを隠せずにいた。まだ出会って間もない指揮官でも、彼女の様子がおかしいの是一目瞭然であった。見かねた指揮官が声を掛ける。

「どうした？随分暗いじゃないか」

「お友達のニーミちゃんと綾波ちゃんが、そちらの陣営なんです。だから、もしかしたら今後、戦うことがあるかも……」

「……なるほどな」

指揮官は腕を組み、天を仰ぐ。無理もない、そう思った。全てを割り切り、友人とやり合うことが出来る性格ではないだろう。彼もそうだった。もし仮に、演習で戦ったホーネットと、血で血を洗うような戦いをする事になったら。そう考えると、彼の胸は締め付けられた。彼女とはまた戦ってみたいと思うが、そういった類のものを望んでいるわけではない。

今度は床を睨む。その間、ジャベリンは一言も発さない。

しばらく考えてから、こう切り出した。

「大体事情はわかった。要はそのレッドソックスとも戦っていくってことだろ？」

「……………」

「確かにレッドソックスは強敵だな。メジャーだし」

「……………アクシズです」

「似たようなもんじゃない？7文字中3文字同じだぞ」

「……………過半数合っていないじゃないですか」

ジャベリンが乗ってきた。彼は内心ホツとし、言葉を更に重ねた。

「細かいことは気にするな。響きは似てる！似てるったら似てる！ど

うだ、そう言われてみると似てる気がしてくるだろ!」

「似てませんよ……それにレッドソックスって野球チームですよね？」

『アズールレーン』とかけて野球ととききます」

「？」

「ホラ、「その心は？」って続けて」

「はあ……その心は？」

「どちらも、たまをうたないと勝てません」

「あ、ちよつとうまい」

「フフフ……」

得意げに何故か襟元を整える指揮官。

「つて、そうじゃなくつて。指揮官、野球好きだったんですか？」

「いや全然。見たこともやったこともない」

「ええ……なんで野球の話振ったの、この人」

ジャベリンは呆れたように、大きく息をつく。なんだか、色々考え込んだのが馬鹿らしくなる。

「もう、少しは真面目に考えてくださいよう」

「そんな深刻になるなって」

「そうは言いますけどね……」

「別にお先真つ暗つてわけじゃないだろ？だから、もつと明るくいこう。その方がお前っぽい」

「あ……」

(もしかして、私を元気づけようとして……?)

わざとふざけたのだろうか。そう言えば、演習開始前にガチガチになつていた時も、指揮官は変なことを言い続けていた気がする。

「今は確かに厳しい状況かもしれない。だが、それなら解決策を考えればいい。そうだろ？」

「……………」

「一見不可能に見えることでも突破口は必ずある。俺達で探していこうぜ」

「……………でき、ますかね？」

「できるよ。俺達は、“いいコンビ”なんだろう？」

「……！はい！」

「R-9とフォースみたいなものだ」

「……わかりません！」

「む……ま、まあそれはそれとして、さっき言ってた二人にもまた会える時が来るよ」

あまりにも根拠のない発言だ。しかし、ジャベリンは先程までよりも大分気が楽になっていた。そうだ、滅入っているだけじゃ何も解決しない。それに、ジャベリンは一人じゃないんだ。

指揮官は話を続ける。

「どんな地獄だろうと、活路を見出していかなくてはならない。俺はな……シューティングゲームでそれを学んだんだ」

ジャベリンは盛大にずっこけた。

「結局ゲームじゃないですか！返して！ジャベリンの感動を返してください！」

「何だと！大量に飛んでくるキューブに対応できるようになる感動が、ドリル（3万点）を大量に壊してハイスコアを更新する喜びが、お前には理解できないというのか！」

「やったことないもん！わかるわけないじゃないですか！」

「じゃあお前もシューティングをやるのだ！心配するな！お前の回避スキルがあれば何でもクリアできる！とりあえず『達人……』」

人差し指でジャベリンを指しそう熱弁していたが、指揮官は急に冷静になり手を引っ込めた。

「……いや、すぐにはやめとこう」

「？どうしてですか？」

「お前と約束してたのを思い出した。そっちが先だもんな」

アウトドアの楽しさをジャベリンが教えるという約束だ。あの時彼は、適当な理由をつけ逃げているようにも見えたが、決してそうではなかったらしい。

「アウトドアかー。気分転換にもなるし、いいかもな」

「指揮官……」



「後お願いなんだけど、弁当作ってきてよ。趣味なんだろう？」

「えっ……あの時、ちゃんと聞いてたんですか？」

「まあ、一応。お前のことだし。だから一応、な」

そう言っただけで指揮官はそっぽを向く。照れてると明言しているようなものだったが、巧妙にそれを隠す術を彼は知らなかった。ことシューティングにかけては様々な知識、テクニクを有しているが、それ以外はそうでもないようだ。

ジャベリンは嬉しかった。指揮官が自分のことを気にかけてくれること。わざとボケてなぐさめようとしてることに。聞いてないようで、ちゃんと話を聞いてくれたこと。その気持ちを、彼女は言葉よりも、身体全体で表現したくなった。

「しきかーん！」

「あー、うるさいうるさい。ひつつくな……くすぐるな！やめろ、ホントやめろ！」

ジャベリンを引剥がそうと両手でぐいぐいと押す。しかし普通の人間が、普段戦闘をしているジャベリンに力で敵うわけもなく、離れてくれない。

「嫌です！放しません！」

「うざい！」

「本当はジャベリンのこと可愛いと思ってるくせに。このこのー」

「な、何で覚えてんだよ！忘れろ！」

「指揮官が言ったからです。だから忘れてあげません！」

何も知らない人には、この二人の無邪気な姿が果たしてどう見えるだろうか。仲の良い兄妹か、それとも気心の知れた友人同士か、それとも……。少なくとも戦争の真っ只中にいる上官と部下とは思わないだろう。

こんな二人が後に、様々な勝利を収め、その中途仲間になったホーネットと共にその名を海域に轟かせることになる。しかし、それはまた、別のお話……

完

「……とりあえず、戦争が終わって、地球が割れた時の対策を考えよう」

「予想がエグすぎます、指揮官！」

お後がよろしいようで……

MISSION COMPLETE